



# PHOBIA

第一節 愚王の帰還

霜月音闇

イラスト：赤津豊

蛇に唆され、男は禁断の果実を口にした。

その行為は神との決別。

神を裏切った男は楽園を追放され、地獄に墮とされた。

全てを奪われ、己を奪われ。

もがきのたうちながら、男は地獄を這いずり回る。

「それが裏切りの代償よ」

蛇の皮を被り、女は呟いた。



泣いている。

声に起こされ、僕は薄く目を開ける。ぼやける視界、その

向こうにライトの明かりが見える。徐々に焦点があつていき、

自分の状態に気が付いた。

仰向けで床に転がる身体。その上に座る一人の少女。少女

は涙を流し、俯いている。少女が手を添えているのは柄、僕

の胸に深々と突き刺さったナイフの、柄。青く輝くナイフの

刃は金属ではない。鉱物の様な輝きを放ち、仄かに青く揺ら

めいている。

痛みは感じない。

そんなことよりも、僕はただ少女のことが気がかりだった。

泣かないで。

言葉にしようとするが、うまく出てこない。全身に力が入

らず、少女の涙を拭うことすらできない。

泣かないで。

「ごめんなさい、ごめんなさい」

少女は何度も謝りながら涙を流す。

なか……ない……で。



(呼んでいる)

白い息を吐き出し、漆黒の魔人は猛る。鈍く輝く赤い眼光、

漆黒の装甲、その隙間から赤い炎が漏れる。

漆黒の魔人はひたすら前へ進む。渦巻く砂塵の向こうを目

指して。

その魔人に群がる、鉄、鉄、鉄、地平線を埋め尽くすメイ

ンカメラの赤い輝き、機械の亡者達。

魔人は猛り、機械共を一蹴する。死を恐れず、むしろ求め

るかのように、群がり覆い被さる機械共を、魔人は破壊し尽

くしながら進む。襲い来る機械兵のその姿は、まるで蜘蛛の

糸に群がる亡者、救いを求める信者。魔人はそれを、無慈悲

に薙ぎ払う。

魔人の胸に刻まれた傷痕。そこからは赤い炎が漏れ、闇の中でも自身を照らす。命の輝き。黒煙の中でも、爆炎の中でも。この傷が、己を、確認させる。絡みつく機械兵の腕を引き千切りながら、前へ、前へ。その先に何もなくても。

(君が呼ぶ声を。

声が聞こえる。

僕を、呼んでいる。

声が聞こえる)



彼は夢を見た。

砂煙翳る落日の下の大地を、彼は這いずっている。

呼んでいる。

聞き覚えのある声が彼を呼んでいた。

幾重にも重なる声が心の中に響き渡る。

思い出せない。

(誰の) (声なんだ?)

(なぜ俺を?) (なぜ僕を呼ぶ?)

彼には何もなかった。名も、過去も、記憶でさえも。ただ、呼ぶ声だけが彼を確認させる。この声だけが、自分を必要としている。この声を求めること、それだけが彼の存在理由だ

った。

『地を這う貴方は、盲目の蛇。死と再生を無意味に繰り返す、ウロボロス』

女の声があった。

落日が翳り、影がかかる。顔を上げると、そこには女が一人、砂煙に吹かれ立っていた。落日に煌く青い瞳、それは冷たく深く、澄み渡っていた。

女の右手には重厚な黒い銃が握られていた。それを彼の額に当てて、女は薄く微笑んだ。

「蛇が勧めた果実と神が勧める果実、どっちが口に合うかしら?」

声が聞こえる。

何処からか、声が。

黒い銃が彼の眉間を打ち抜いた。

落日に銃声が鳴り響く。

「貴方は神無、神を裏切り、神を殺す者」

そこで途切れる。まるでフィルムが切れたように。



「……! ……!」

誰かが、呼んでいる。

（誰だ？）

頬を叩かれる感触、まどろむ意識に痛みが加わり、彼を現実  
実に引き戻していく。

「起きなさいってば！」

ゴッ！

拳が頬にめり込み、鈍い音を立てる。

「つ……、いったー！」

手をばたつかせ、殴ったほうが痛みを叫ぶ。目を開けると、そこは木造の空洞だった。充滿する埃っぽさと木の臭い。空洞の両脇に積み上げられた長椅子群と、そして、高い天井の両脇に輝くステンドグラスがある。

「ここは？」

頭を押さえ、彼はゆっくりと体を起こす。

（何も無い、頭の中が空っぽだ。俺は何をしていたんだ？いや、そもそも、俺は何者なんだ？）

「あ、起きたみたいね」

飛び跳ねていた人影は拳をさすりながら、微笑みかける。ステンドグラスから差し込む薄暗い光が浮かび上がらせる人影の輪郭。黒い長髪に赤い瞳、薄い唇に微笑みを浮かべるスレンダーな女性。いや、女性と言うには若すぎる印象を受ける、そんな、女性。

「君は？」

「私？ 私は斐文<sup>ひふみ</sup>」

「じゃあ、俺は？」

「君は神無<sup>かんな</sup>」

「神無？」

「そう、神無」

「ここは？」

「スネイル、隔離された楽園よ」

人々は言った、それは閉鎖された楽園だと。

集合都市『スネイル』、強化ガラスの屋根に覆われた閉鎖都市群の総称。中央主都市を中心に各個の街が、張り巡らされた無数の通路で繋がっている。工業、農業、林業、産業、漁業、全てをまかなえるだけの規模を持った集合都市、それがスネイル。

この街には総てがある、だから楽園。もちろんそれだけの意味ではない。地獄が隣にあるから、ここを楽園と呼ぶ。スネイルの外は砂塵と死が支配する滅びた大地が続いている。生きる事の出来ない大地。そこには、死が闊歩している。人だけを殺す兵器『リスカ』。何処から来たのか、何のために存在するかは不明。だが、そいつらは街の外にいる。だから人はそれに怯え、この殻の中に閉じ籠る。閉鎖された楽園。天井の強化ガラスのむこうに丸く曇った太陽が見える、隔離された楽園に。

「思い出せない……。何で、何で記憶が戻らない？」

「おおっと、レディにこれ以上の質問はノーセンキュー、とにかく現状だけ押し付けさせてもらおうねえ」

斐文はそう言うのと内ポケットから小さな機械を取り出した。簡易操作で浮かび上がる立体ホログラフィー、それは棒の刺さった球体を描き出した。

「これわかる？」

「？」

「この世界の全体図よ。ここがスネイル。で、その中心にあるこの棒、これが世界の中心、神の塔。私たちはここを目指しているの」

「？ 何で？」

「貴方が一番よく知っているんじゃないかしら」

そういうと斐文は妖艶に微笑む。

「貴方を呼ぶ声」

頭痛を伴いノイズが走る。

「聞こえるでしょ、耳を塞いでも」

（聞こえる。ざわめくノイズ。それに混じって、確かに俺を呼ぶ声が。名前を呼んでるんじゃない、言葉でもない、でもこれは、俺を呼んでいる）

「さあ、行きましょう。神の塔へ。道案内は蛇（私）がするわ」

開け放たれる両開きの扉。吹き荒ぶ砂吹雪の向こうで輝く、赤い光群。この光は、夢で見た機械人形。人のみを殺す兵器。『リスカ』

（呼んでいる）

俺は、進まなければならない。

思い出すんだ、君を。

この瞬間だけは、世界が止まる）

携えたナイフを抜き、神無は走り出した。リスカの群れに向かつて。群がる機械人形たちの真ん中で、神無は吼える。煌くナイフの刃が描く軌跡、それは美しく、リスカを切り刻んでいく。

『そう、思い出して』

意識にノイズが走る。心に何かが混ざる。反響して聞こえる声。それはハウリングするように次第に大きくノイズを走らせる。

「！」

呼ばれた気がして不意に天を仰いだ。

天を覆う強化ガラスの屋根、その向こう、砂吹雪の裂け目に一瞬塔が見えた。

（呼んでいる）

群がるリスカの中で、神無は天に手を伸ばした。

（呼んでいる、君が！）

「あ、あああああああああああ」

(届かない、届かない)

(俺を) (僕を)

「再起動完了。目的の刷り込み、完了。計画通りね」

斐文の手に握られた銀色の銃。それを己のこめかみに当てて斐文が微笑む。

そこで神無の意識は途切れた。



この匂いは、鉄、いや、血の匂いだ。

肌が引つ付き、突つ張る感覚。

何回味わった？

それすら定かではない。

この狂った小部屋で一人。

僕は死を纏う。

どんなに死を見ても、どんなに奪い取っても。

何も感じないよ。

だって、僕は最初から。

生きていないんだから。



闇だ。

目の前にあるのは赤い闇。

それが自分の臉だと神無が認識したのは、薄く開いた時だった。眼に突き刺さる人工の光。それを右腕で遮り、神無は大きく息を吸った。

肌を伝い砂粒が床に落ちる。自分が床に倒れているという現実を知り、神無は力なく右腕を下ろす。

「生きていたか」

人工の光を遮り、落ちる人影。明かりに眩んだ眼が焦点を取り戻し、神無は影の輪郭を認識する。垂れ下がる長い前髪、迷彩柄のバンダナ、黒い眼をした男の顔が眼前に見える。

「生存者二人だな」

バンダナ男は顔を上げると髪を掻き揚げる。神無はそれにつられるように体を起こした。身体についた砂が流れ落ちる。ハッキリしない頭、浮かび上がる無数の映像、無理やり叩き込まれたような無数の記憶で頭が混乱する。

呆ける神無の背中を、後から来た人影が平手で叩いた。

「おっはよく、神無！」

振り返るとそこには一人の女性が立っていた。黒い長髪に赤い瞳、薄い唇に微笑みを浮かべるスレンダーな女性。神無は頭を押さえ、記憶を搾り出し女性の名を呼んだ。

「斐文か、どうやら生き延びたみたいだな」

「いや、やばかったよね、実際」

明るく笑いながら、斐文は段差に腰をかける。

見回すと、そこは大きな通路の脇に作られた一つの休憩所。

そこにいるのは、神無と、斐文と、バンダナ男。

「どう？ ヤハヴェ、私の電子地図の具合？」

難しい顔をしながら電子地図を弄ぶバンダナ男に、斐文が話しかける。

「ダメだな、いかれちまつてる。ノイズ以外映しやしねえ」

「うへえ、最新機種なのに」

「最新？ 中央じゃ型遅れもいいとこだぜ、何処の田舎から出てきたんだよ」

ヤハヴェと呼ばれる男は、電子地図を斐文に投げて返した。

「さて、神無も起きたし、近くの街まで送ってやるか。電子

地図なしじゃ身動き取れねえだろ」

そういうとヤハヴェは立ち上がり、立てかけてあった巨大な十字架を背負った。

神無は頭を押さえ、大きくため息をつく。そんな神無に、ヤ

ハヴェは手を差し伸べた。

「自己紹介がまだだったな、俺の名はヤハヴェ、ヤハヴェ・アッラーフ。ギルドのメンバーで、この辺の管理をしている。

お前のことは斐文から聞いている、短い間だがよろしくな、

神無

「ああ、街まで案内、よろしく頼む」

手をとり、引き寄せられ、神無は立ち上がる。ふらつく頭、もつれる足、二・三度頭を振り、よろめきをかき消す。

「いやあく大変だったよねえ、神無。扉を開けたら砂煙、中に入ったら砂嵐でさあ、緊急アラームと同時に来た扉は閉まるは、IDカード通しても扉は開かないはでさあ。やつこの思いで出口見つけたと思ったらリスカの群れ、蹴散らしたと同時に砂雪崩れ、いや、ほんと、死ぬかと思ったよ」

笑い混じりに斐文がヤハヴェに話しかける。ヤハヴェは先頭を歩きながら微笑み答える。

「リスカは本来、街の外にしかいないんだがな、あそこは外壁が七〇%も無くなってたからなく。砂吹雪を見たらその街には入らない、この世界の常識だぜ？」

指を振りながら笑って話すヤハヴェに、斐文は口を尖らせる。

「だって、突っ切ったほうが早かったんだもん」

「この狭いスネイル、そんなに急いで何処行くよ？」

その問いに、話に加わらず距離をとっていた神無が静かに答える。

「神の塔」

ふと、笑いが消える。

「神の塔？」

怪訝そうなヤハヴェの言葉に、斐文が反応する。

「そう、観光にね。中央区の真ん中にあるし、上京がてらに見てみたいなあ、って」

「……なんだ、そんなことか。俺はてつきり、上るのかと思っただぜ」

怪しい微笑みを浮かべるヤハヴェ、その微笑みにあわせ、斐文は笑う。

「まっさかあ、んなわけないじゃん」

ヤハヴェの言葉を冗談に摩り替えて笑い飛ばす斐文、つられてヤハヴェも笑う。ただ、神無の表情だけは変わらなかった。

「でさ、話は変わるけど、さつき自己紹介で言ってた、ギルドって、何？ 管理してるとか言ってたけど」

「ん、ああ、そんなことも知らないのか、本当に田舎者だな」

「ぬっ、いいじゃん。おしえてよ」

ギルドⅡ武装組織『騎士団』と対をなす組織。街の見回りと破損箇所の修復、連絡が途切れた街の調査、街から街の道中護衛依頼などが主な仕事だ。街の整備を目的に設立された組織だったが、やることは徐々に増え、今は様々な事をこなす何でも屋という位置に収まっている。

「へえ、何でも屋さんねえ」

「そ、何でも屋、人助けもするんだぜ。まあ、ちよつと職務怠慢で街の調査忘れてたけどな、はっはっは」

「そんなんでいいのか、その組織は」

談笑しながら銀色の通路を歩む。足取りは軽く、親しげに歩いていく。後を歩く神無を除いては。馴染めないな、と神無は、笑う二人を後ろで見ながらため息をついた。

（——っ！）

神無とヤハヴェは不意に何かにつき、歩みを止めた。

「聞こえる」

神無は呟く。

「ああ、何か近付いてきている」

ヤハヴェは上着の内ポケットから電子地図を取り出し、簡単な操作をした。空中に浮かびだすホログラム、それは何度か形を変え、最終的に簡略された通路図を映し出した。その真ん中に浮かび上がる三つの青い○。そして、その後を追う様にゆっくり動く、赤色の逆三角錐。

「……マジかよ」

「リスカ？」

そう聞く斐文にヤハヴェは静かに答えた。

「魔人だ」

ギ、ギギギ、ギギギギギギギギ。



引つ掻く音、鉄の壁を硬い物で掻き巻る、そんな音が静まり返った通路に木霊する。何か、来る。

——「顔、顔……」——

呻き声を這わせ、壁を片手で掻きながら、何か通路をやってくる。

「魔人……それって、リスカより」

「何千倍もつええ」

顔を強張らせ、ヤハヴェは身構える。

魔人Ⅱ所屬、目的共に不明。外から来たものという説もあるがそれも定かではない。戦力、殺傷力共にリスカを凌駕し、再生能力まで持った死なずの化け物。

「確認されているのは全部で四体だ。ナイフが通らない装甲と再生能力。殺傷力はハザード級だ」

「確かに難敵だな」

「難敵なんじゃなくて無敵なんだよ。魔人に遭遇した時の鉄則。一人なら諦めろ、多数なら……：：：囷を使って逃げろ」

そういうとヤハヴェは二人に視線を送った。

「ここから真っ直ぐいけば街がある。振り返らず、全力で走れ」

近付く不快な引つ掻き音と呻き声。通路を曲がり、そいつは、現れた。壁に爪を立て、うなだれながらそいつはふらつく。顔を覆う片手、白い長髪が、ふらつくたびに揺れ動く。

全身白尽くめの男。男は顔を押さえ、呻き続ける。

「ボクの顔……ボクのかああお」

指の隙間から覗く赤い眼光。それは切り裂くような殺意を孕んで三人に突き刺さった。

恐れ。

そう、その感情は恐怖だ。

(これが、魔人!?)

桁外れの殺気に神無と斐文は言葉なく凍りついた。手を顔の前に寄せる斐文にヤハヴェは叫ぶ。

「祈るな!」

その一喝が狂った殺意と恐怖をかき消す。担いだ十字架を下ろし、ヤハヴェは眼を細めた。

「この世に神なんかいねえ、無駄な事をする暇があったら、走れ。騎士団じゃねえんだ、そんなに時間稼げねえぞ」

「う、うん」

素直に頷き、斐文は神無の手をとる。

「いくよ、神無」

「逃げるのか?」

「そうよ!」

「何で? 俺は」

胸を押さえ、神無は俯いた。疼く胸に傷痕。自問と荒い息を繰り返しながら、神無は立ち止まる。

「顔、顔、顔、ボクの顔は何処おー！」

叫びと共に男は歯をかみ締めた。その瞬間青い爆炎が広がる。指の先から広がる白い装甲。爆炎の中で、男は白い魔人に変わる。全身を白い装甲で包んだ魔人が、剥ぎ取るように引つ掻きながら、顔を覆った手を払った。床にぶつかりながら腕が跳ねる。手の甲が床に着くほど長く伸びた腕、それがこの者の異形を物語る。

「死して、死してこそ」

うなされるように呟きながら、白い魔人は両手を放り出してくる。向けられる隙だらけのうなじ。だが、踏み込めないほどの殺意が周辺に充満している。

「幸福になれ！」

叫ぶ白い魔人に気圧され、神無は我に返る。初めて見る魔人の姿、それはどこか、見覚えのあるものだった。

「神無！」

強く手を引き、斐文は神無を連れて通路を走った。それを横目で見送り、ヤハヴェはため息をつく。

「ちっ、ガラじゃねえな、人助けは。が、自己犠牲のヒロイズムに酔うのも悪くねえ」

自傷気味に笑うヤハヴェ、それと向かい合う白い魔人。

刹那、振り払われる長い腕が間合いを無視して振り回された。二・三回空振る長い腕が壁や床、天井を掻き塗り火花を

散らす。ヤハヴェは十字架を盾にしながら後ろに飛んだ。何度か白い爪が十字架を抉る。その衝撃に弾き飛ばされ、ヤハヴェはよろめきながら膝をついた。

「ちっ、足掻くか」

「っ！」

胸を押さえ、神無はその場に立ち止まった。手を引いていた斐文は急ブレーキをかけられ、一瞬宙に浮く。

「ちよっ、神無？」

胸を押さえ、神無は呟く。

「……罰を」

「え？」

聞き返すと神無は立ち上がり、はっきりと言いつつ放った。

「罰を与えよう」

斐文の手を離れ、神無はもと来た道を走った。後ろで斐文が何か叫んでいる気がする。その言葉は神無を繋ぐ鎖にはならなかった。

「くっ！」

何度目かの衝撃。火花が散り、ヤハヴェの眼を眩ませた。

魔人の長い腕は間合いを見誤らせる。受けた十字架には無数の爪痕が刻まれ、攻撃の激しさを物語る。

魔人の攻撃は大振り、逃げるチャンスはあった。だが、二人は街まで逃げのびただろうか、その心配が頭をよぎる。タイミングはあっても逃げ切れはしないだろうな。やはり、死に時か。そうヤハヴェが思った瞬間、人影が横を駆け抜けた。

そのまま魔人に飛びかかる影、それは。

「神無！」

逆手に握られたナイフをかざし、神無は魔人の赤い眼を狙って振り下ろした。

カッ！

硬い音と共に、ナイフは白い装甲に弾かれる。弾かれ神無の体が宙を舞う。

ナイフを防いだ魔人の左腕が振り上げられ、空を切って神無を襲う。叩きつけられる刹那、神無は襟首をヤハヴェに掴まれ、後方に投げ飛ばされた。

ヤハヴェは十字架を盾に、魔人の攻撃を防いで神無を守る。

「てめえ、何で戻ってきやがった」

苦々しく搾り出すヤハヴェに神無は答える。

「罰だ」

「はあ？」

「罰を与えにきた」

「何言ってるんだ、てめえ！ ぶっ壊れてんのか？」

「ああ、壊れているさ」

そういつて神無はナイフを手にする。その姿を見て、ヤハヴェは大きいため息をついた。

「死んでも祈らねえぞ。俺は神が、大っ嫌いだからな！」

叫び、ヤハヴェは盾にしていた十字架に手をつっ込んだ。

分解し崩れ落ちる十字架、その中から巨大な銃剣が姿を現す。十字架型の銃剣。大きな刃を銃身につけた特殊銃。刃を振り翳し、ヤハヴェは構える。

無防備に両腕をたらず魔人と、二人の視線が交差し、ふいに静寂の堰を切る。

乱れ振られる両腕を刃で受けつつ、二人は魔人に接近する。弾け散る装甲片と火花、その中を疾走する。魔人の両腕は不規則かつ、効率を考えない動き、それはまさに隙。だが、それをつけない。いける、そう思う一瞬、恐怖が歯止めをかけるのだ。

「くっ！」

その一瞬でヤハヴェは引く。そう、彼は普通の人間だから。そこで行けるものこそ、魔人と同類。

「神無！」

ナイフを振り翳し、神無は跳ぶ。そして、魔人の首筋に刃を付きたてた。

カッ！

硬い音と共にやはり刺さらぬ。無表情に見下ろす神無の視線と振り向く魔人の視線が交差する。その瞬間、神無の頭に映像が流れ込んだ。

砂嵐を映すテレビを見詰め、少年は息を殺す。

「ずつとこうだ、ノイズ、ノイズ、ノイズ。ボクはただ、笑いたいだけなのに」

暗い個室に一人。

「今日も仮面をつけてお遊戯です」

「小さい小部屋で戯れます」

自動で目の前のドアが開き、眩い光が差し込む。目の前に広がる開けた部屋、そこには仮面をつけた少年達が思い思いに佇んでいる。

「この監獄でボクは、いつまで争い続けるのですか？」

部屋にベルが鳴り響く。それが合図、一気に部屋中が殺気立つ。

「死ねば、幸福になれますか？」

「両手を血に染め、今日も踊ります」

「死ぬのは怖いですが、空っぽのまま死ぬのは嫌です」

積み重なった屍と砕けた仮面の破片。その上で、少年は宙を仰ぐ。笑えない。目に焼きついた砂嵐が頭に走る。

ノイズ、ノイズ、ノイズ。

「がつ！」

頭を押さえ、神無は転げ落ちる。

ノイズが頭を駆け巡る。転げる神無を見下ろし、魔人は呟いた。

「ボクに触ったな」

「……何が悪い」

荒い息を付き、神無は答える。動きを止める魔人、その隙をついてヤハヴェは懐に飛び込んだ。

「食らえ」

切り上げる刃の一閃、振り下ろす刃は切り上げる軌跡と交差し、×の字を描く。そして、そのまま突きへと移行する電光石火の三連撃。もちろん、こんな攻撃が本命ではない。これは本命へ移行するための連撃だ。本命は――。突いた刃が真ん中から別れ、二つのレールを作る。刃に走る青い稲妻。そう、この銃剣は、特殊レールガン。突いた状態でヤハヴェは引き金を引く。そう、それが本命。必殺の一撃。

「つ！」

電装した弾丸が、プラズマを纏い魔人の腹を貫いた。衝撃に弾かれ、魔人は宙を舞う。引き摺られる両腕が威力を殺し、少し飛んだところで魔人は地に伏した。帯電する刃を振り払い、ヤハヴェは神無に走りよる。

「大丈夫か？」

「ああ」

頭を押さえ、神無は立ち上がる。

(なんだったんだ、今のは?)

過ぎった映像に神無は頭を悩ませる。

(共振したのか、俺と魔人は)

「っ！ ヤハヴェエ！」

気付いた一瞬、振り上げられた白い爪がヤハヴェエを引き裂いた。

「がっ！」

舞い散る鮮血の向こうから、白い腕が伸びる。

「っ！」

伸びた腕が大きく床を払い、神無を壁に叩きつける。

腹に丸い穴を開けた白い魔人だった。何事も無いように佇んでいる。

「やっぱり、きかねえのかよ」

地に伏し、ヤハヴェエは微かに呻く。背に刻まれた傷が深い

せいか、溢れる鮮血が止まらない。

魔人は気だるく白い息を吐き出すと神無を睨みつけた。

「死してこそ、幸福に」

そこまで言うのと、魔人は急に苦しみだした。神無を壁に縛りつけたまま、片手で頭を抑え、膝をつく。

「お、おお、おおおおおお」

もがき苦しむ唸りと共に魔人は壁を掻きながら神無を天井

に叩きつける。その衝撃で神無は意識を失い、そのまま地面に激突して覚醒する。

「ぐっ！」

苦しむ魔人の横で、立ち上がる人影が一つ。大量の血を撒き散らし、ふらつきながら立ち上がるヤハヴェエは、手に持ったレールガンを振り上げ、猛る。

「ああああああああ！」

気付く魔人の頭を二本のレールが挟み、勢いよく壁に突き刺さった。

「頭が無くてもいけるか？」

帯電する刃、そこに挟まれた白い頭、それは次の瞬間消え去った。壁に丸い穴を残して、頭の無い魔人の身体が床へ崩れ落ちる。

それを見下ろし、ヤハヴェエは膝をついた。鮮血が白い床を染めて行く。ヤハヴェエの腹部には、魔人が繰り出した五本の爪が突き刺さっていた。

「くそ、最後の最後で、これかよ。やってくれるな」

爪を引き抜き、ヤハヴェエは立ち上がる。

「いくぞ、神無」

ふらつきながら、ヤハヴェエは倒れる神無に歩み寄る。一歩一歩、血を滴らせながら。襟首を掴み、銃剣を引き摺りながら、ヤハヴェエは歩いた。意識を失うその瞬間まで。

血の海に倒れこむヤハヴェ。その後ろで、魔人が動いた。立ち上がる白い魔人。傷口から溢れる青い炎は輪郭を描き、欠損した箇所を再生させていく。もちろん、失った頭も。

魔人は白い息を吐き、倒れるヤハヴェを見下ろした。そしてその視線は、神無を捉える。

「君は、誰？」

ゆっくり腕が動き、神無に触れようとした一瞬、そいつは現れた。

「止まりなさい。クラウン・ザ・ホワイトフェイス」

人工の光に煌く青い装甲を纏い、禍々しく光る黄色い瞳で白い魔人を睨み付ける。

青い魔人。

「ボクを知っているの？」

「ええ、今の貴方以上にね」

黒い銃を右手に、青い魔人は跳んだ。振り上げられる白い腕を空中で華麗にかわし、白い顔に蹴りを打ち込む。吹き飛び倒れる白い魔人の上に舞い降り、青い魔人は黒い銃を突きつけた。

「思い出しなさい、貴方自身を」

銃声が響き渡り、黒い銃から硝煙の煙が立ち上った。白い魔人を見下ろしながら青い魔人が呟く。

「神はいる。でも、全能じゃない。だからこんなにも簡単に、

計画は捻じ曲がる」



空。青い空。

あの子が、笑って。

僕は、いる。

見下ろす眼に、小さな手と白い服が映る。

顔を上げて前を見渡せば、緑の絨毯が一面に広がる。

街も見える。空に向かって走る無数の鉄骨と、日の光に反射して輝くガラス張りの屋根だ。

息を吸い込めば、むせ返るような緑の匂い。

あの子は笑いながら手を振る。

服の白を気にしていた僕も、たまらず走り出した。

『……!!』

僕は誰かの名を呼んだ。



そこで目が覚める。

体を起こした瞬間、神無は全身に走る激痛に短く呻いた。

(ここは、何処だ?)

辺りを見渡す。誰の気配もない。白い布で覆われた四角いクッション、それは柔らかすぎず、硬すぎない。頭の下にあったクッションも中は綿ではないようだ。それに反し、身体にかかる厚手の布は羽をつめたように軽かった。草で編まれた床に木の天井。木製の柱と木組みの壁。壁には白い紙が張られていた。知識にある、和という作りだ。

外の床を叩く音が近付き、何者かが戸を開ける。入ってきたのは仮面をつけた喪服の女性だった。

「お客様も不運ですね」

女性は微笑み手にした盆を床の上に置く。

「この世界で生きるのは苦しいこと、死んでしまえば幸福になれますのに」

笑いながら話す仮面の女性に、神無はため息混じりに答える。

「そういう考えか、この街は」

「宗教的なものですよ。皆そう考えているわけじゃありません。でも、死んで神の御許にいけるなら、本当に幸せなのかもしれませんね」

「そう、かな」

茶をすすり神無は答える。では、ごゆっくり、そういつて仮面の女性は部屋を出て行った。

しばらく沈黙の時が流れる。

不意に神無は立ち上がり、廊下に出た。廊下は広く、何人かの人が行きかっている。その全ての人が白い仮面をつけていた。全て泣き顔の仮面、黒で統一した服を着た集団。その集団を掻き分け、神無は建物から飛び出す。

(気分が悪い。いや、不快だ)

「神無！」

呼ばれて、神無は振り返る。そこにいるのは斐文。斐文は仮面を手にもみ寄る。

「よかった、気がついたのね」

「ああ……ヤハヴェは？」

その名を出すと、斐文は俯き黙った。その様子で神無は察する。

「そうか」

無理して笑い、斐文は神無に仮面を差し出す。

「この街でのしきたり、不幸があったら仮面をつけるの。だから、はい」

仮面を受け取ると、斐文は自分の仮面をつけ、黒い集団の中に走っていった。神無は、一人だけ取り残されたような疎外感を感じながら、近くに置いてあるベンチに腰をかける。

「不快だな」

眩しと共に、誰かが神無の隣に腰をかける。包帯が巻かれた横顔、その奥で輝く何処までも暗く黒い瞳。男は神無の方

を見ないまま喋る。

「こいつらは俺達とは違う。まるで、猿の群れの中にいるような気分だろ？ どいつもこいつも屑ばかりだ。滅ぼしてやろうか？ 天使のように」

それだけ言うと言はベンチから立ち上がった。そして、仮面をつけ、参列の中に消えていく。神無はそれを目で追い、すぐに目を伏せた。そして、ゆっくり背もたれに身体を預け、天を仰ぐ。天にかざす仮面、その隙間から見える空は狭く、何処までも人工的だった。

（殻をかぶった街か、まるで棺だな）

仮面は泣き顔で、悲しみだけを表現していた。

その悲しみは誰の為？

死せる者の為？

残され生きゆく者の為？

「何浸ってんだ？」

聞き覚えのある声に神無は仮面を下ろす。そして立っている人物を見て目を疑った。

「ヤハヴェ？ 生きていたのか」

「残念ながら、死にそびれたな、お互い」

笑いながらヤハヴェはふらつく。片手には点滴をぶら下げたポール、もう片方の手には布を何重にも巻いた杖状のもの。それに寄り掛かりながら、ヤハヴェはベンチに腰を下ろした。

「神無、お前、何もんだ？」

「さあ」

微笑を含んだヤハヴェの問いに、神無は即答する。その答えにヤハヴェは怒らない。

「記憶がねえんだってな」

「ああ」

「何処から無い？」

「全部」

「名前以外か？」

「名前も貰いもんだ」

「じゃあ、何もねえんだな」

「ああ」

淡々と問答を続け、二人はため息をついた。

「わかんねえ。じゃあ、何であの時戻ってきた？ 死にたが

っているようにも見えねえがな」

ヤハヴェのその言葉に神無は答えを一瞬迷う。そして、少し考えて答えた。

「俺の中で、誰かが叫んだんだ。罰を与えろって」

「誰か？」

「ああ、知ってる声、いや、知らない声」

「神無を知ってる、誰かかもな」

「俺を知ってる、俺？」



「お前を知ってる、誰か」

「わけわからんねえな」

「お前がわからんねえなら、俺もわからんよ」

そう繰り返してヤハヴェはため息をつく。つられて神無もため息をついた。

「神無、お前、何がしたい？」

「え？」

「その空っぽの頭で、神の塔まで行って、何がしたい？」

「さあ」

「さあって、神の塔が旅の目的だろ？ お前と斐文の」

「わからない」

「わからねえって、お前」

「言っただろ、俺には何も無いって」

「じゃあ、何しに行くんだよ」

その問いに神無は眼を細めた。

「……呼んでるんだ」

「呼んでる？」

「ああ、あの子が呼んでるんだ」

「あの子って、誰だよ？」

「夢に出てくる女の子、いつも泣いてる」

「夢の中のことだろ、現実味がねえ」

「それでも俺にはそれしかないから」

そう、それだけ。胸に刻まれた傷痕、それが現実。夢に出てくる女の子はナイフを深々と胸に刺し、泣いている。この夢に出てくる女の子は、多分、記憶。空っぽの中に微かに残った、己の残骸。

「手繰り寄せる唯一の手がかりってやつか」

「そういうことだ」

「じゃあよ、斐文はなんなんだ？」

空から視線を落とし、身体をかがめてヤハヴェは問う。

「俺は自分の事すらわからないんだ。本人に聞けよ」

「聞いたが笑ってはぐらかされたよ。普通の女の子ですくてな」

「じゃあ、そうなんだろ」

「付き合ひ、長くねえのか？」

「四日ぐらいかな。目を覚ましたら引き摺られてた」

「引き摺られていた？」

「ああ、砂嵐の中、斐文は一人で俺を引き摺ってた」

「砂嵐……もしかして、お前ら、外から来たのか？」

「外？」

「ああ、外だ、この街『スネイル』の外」

「すまない、ヤハヴェ。説明してくれないか、この街のこと、

外のこと、神の塔のこと、俺は何も知らないんだ」

「斐文に教えてもらってないのか？」

「ああ、特に興味もなかったからな。あいつも俺の事を何も聞かない、だから俺もやつを聞かない、それが暗黙の了解になっているんだ」

「仲間、って関係でもないのか？」

「今の所は俺が戦力、やつが道案内って感じかな。前の街でリスカと戦ったのも俺だからな」

「ナイフ一本でリスカを蹴散らして、街へ辿り着いたってわけか？ お前らおもしれえなな」

「ヤハヴェもだろ？ 白い魔人を倒した」

「さあな、俺も気付いたらこの街にいた。斐文が俺たちをこの街に運んできたみたいなんだが、話を聞くに、魔人なんかいなかったとさ。逃げるってことはねえだろ、可笑しな話しだよな」

「……ああ、可笑しな話だ」

「ま、命あつてのなんとやらだ、深くは考えねえさ。次は何が聞きたい？」

「すべて」

「欲張りめ」

——昔々、世界には一つの塔がありました。神の住む塔、そう『神の塔』。荒れた地を見下ろしながら、神様は思いました。

「一人は寂しいな」

神様は自らを刻み生物の種を作りました。動物、植物、魚、鳥、そして、人間。あつという間に世界は賑わい、神様は安心して眠りにつきました。

神様が次に起きた時、世界はやかましくなっていました。

人々は争い、動物は狩られ、植物は焼かれ、海は枯れ果て、世界は変わり果てていました。絶え間なく鳴り響く雑音に、神様は再び眠れません。

「少しうるさいな」

神様は世界から空を奪い、蓋をしました。そして、その影からは悪魔が溢れ出しました。

「これで静かに眠れる」

悪魔は騒音の種である人だけを殺し、人は閉じ籠るように街に逃げ込みました。殻をかぶって、静かに、静かに。

神が再び起きる日まで。——

「そんな昔話、何百年も前から語り継がれる一片」

「神の住む塔か」

「あくまで昔話だからな、現在あの塔に何があるかは誰も知らない。出口も入り口もなく、周りリスカが無数に徘徊する場所だ。調査すら出来ねえよ。ま、それでもいくのは自由だがな。絶景もなけりや、みやげやも無いがね」

「元からそんなの期待してねえよ、金もないしな」

「ああ、そうだな、地図ぶつ壊れたしな」

「地図？ 地図が壊れるのがなんか関係あるのか？」

「ああ、そうか、しらねえんだよな」

ヤハヴェはそういうと内ポケットから電子地図を取り出し、軽く操作する。空を見ていた神無も思わずそれを覗き込んだ。

「これが俺の貯金残高」

「ほお、これが金か。話しの端々では聞いてたんだが現物を見るのははじめてだ」

「この金ってシステムも結構複雑だな。世界のどつかにあるブレインって言う総合機関を通して……って、まあ、それはいいか。えっと次は、スネイル、だな」

スネイルは神の塔を囲む街の集合体、街を繋ぐネットワーク、通貨、地図、その全てを世界のどこかにあるブレインによって支えられている脆い都市。殻を纏いリスカの侵入を防いでいるが、最近は何んか街中でもリスカが侵入していることがある。その上、魔人。

「この街か」

「ああ、この街の集合体だ」

「集合体ってことは、無数の街がくっついてるってことか」

「その通りだ、何十という街の集合街、それがスネイル。そして、その殻の外。そこには何もねえ。お前が見た通りの砂嵐一色。それがこの世界だ」

「……狭いんだな」

「言えばこんなもんだよ。世界なんつあ。そん中で俺達は、もっとちいせえんだけどな」

指先から、一滴、二滴、鮮血が零れ落ちる。それに気付き、神無がヤハヴェの顔を見る。血の気が引き、痣黒い隈が浮かび上がっていた。

「ちよつと、楽しくて、夢中で喋りすぎたな。上った血が下がってきたぜ」

そういつて屈んだヤハヴェの背中は鮮血で真っ赤に染まっていた。

「さて、迎えが来たみたいだな」

軽く笑って立ち上がるヤハヴェの視線の先には、白い仮面をつけた白服の男。泣き顔の中で一人、笑った顔の仮面をつけた男。男は離れた参列の真ん中で止まり天を仰ぐ。黒の群れの中にある白い点。そういう意味でも目立っていたが、それ以上に目立つ殺意。その殺気がかなりの遠目にもかかわらず、奴を気付かせた。

男は両手を広げて、高らかに叫ぶ。

「死してこそ、幸福になれ！」

開け放たれた白服、その中には無数のコードと黒いブロックがひしめき合っていた。そう、あれは、間違いなく、爆弾。片手にしたスイッチ。リミッターを親指で外し、そのまま、躊躇いなくスイッチを押した。

爆風で吹き飛ぶ黒い参列と舞い上がる砂煙。燃え上がる青い炎の中で、白い魔人が笑った。

「はあ、死神つてやつあ、奇跡もゆるさねえほど几帳面らしい」

ヤハヴェエそういうと、手に持った布の塊を宙に放り投げ、勢いよく布を抜き取った。宙で回転し、光を乱反射する銃剣の刃。その剣を手にし、ヤハヴェエも笑った。

「抗うか、くそつたれな運命に」

点滴を投げ捨てて、ヤハヴェエは行く。迫り来る死へ向かって。

あたりを振るわせほどの殺気が走り、二階の障子が震えだす。その嫌な合唱が、障子に走った亀裂によって途切れた。

砂煙が舞った。

飛び散る火花と鮮血。

一瞬で擦り寄った白い死神を弾き、ヤハヴェエはよろめく。広げられた悪魔の羽根のような長く白い腕、その押し潰すような重圧感にヤハヴェエは笑う。出血のせいかなヤハヴェエの足はおぼつかない。魔人の一撃一撃に翻弄され、血を撒き散らせながらヤハヴェエは踊る。

神無が立ち上がるうとした瞬間、何者かが両肩を押さえつけた。

「客が、舞台上に上がりたがるもんじゃない」

両肩を抑える男、それは顔中に包帯を巻いた黒い瞳の男。一時隣に座った、あの男だ。男は微笑み、魔人とヤハヴェエのダンスを見詰めている。神無は再度立ち上がるうと試みるが、完全に押さえられているせいか腰を浮かすことも出来ない。

「お前は、誰だ」

その問いに包帯の男は笑った。

「俺は傍観者であり、改竄者。さあ、楽しもうじゃないか、人対擬装神を」

爪の連撃を間髪凌ぎ、ヤハヴェエは息を荒げながら笑う。どんな心境なのか、ヤハヴェエは常に笑っていた。諦め？ いや違う、あの眼は。

白い魔人が両手を叩きつける。その攻撃をかわし、ヤハヴェエは魔人の両手を二本のレールで挟み、地面に突き刺して固定する。そのレールへ大地が沸騰するほどの電流が流れ、次の瞬間、魔人の両手が消えた。

「はっ」

銃剣を持ち替え、勢いよく振り上げて魔人の首を挟みこむ。「もう一発」

電撃が走り、白い魔人の首が飛んだ。血の気の引いた顔で笑うヤハヴェエ。頭を失った状態で佇む魔人。頭は地面に落ちた瞬間、青い炎となって消えた。

「……ぐふっ！」

突如、大量の血を吐いてヤハヴェは膝をついた。真っ赤に染まる背中と腹部。開いた傷から大量に出血しているせいか、ヤハヴェは立ち上がることも出来ない。

「はは、限界か」

ヤハヴェは内ポケットから電子地図を取り出し、顔を上げる。見直し、視線のその先に斐文を見つめる。ヤハヴェは笑い、電子地図を放った。

斐文がそれを何とか受け取る。

「斐文、それを持って街をでな。神無をつれてな。そいつがあれば神の塔まで一直線だ。神無に塔を、この世の中心を見せてやれ！」

笑いながら言うヤハヴェの表情に、悲壮感は欠片もなかった。死を迎えるであろう自分を笑い飛ばし、血を吐きながら呼ぶ。

「神無！」

それに答えようと神無は立ち上がろうとするが、両腕で押さえられ、身動きが取れない。

「ヤハヴェ、やめろ、引け！」

押さえられた状態で、神無は怒鳴る。その声を聞かず、ヤハヴェは続ける。

「てめえは運命を信じるか？ 神が作ったシナリオを」

「ヤハヴェ……」

荒い息をつき、血を吐きながらヤハヴェは話し続ける。

「俺は、信じねえ！」

顔を上げ、不敵に笑う。

「神なんかくそくらえだ！ 何もせず、何も出来ない、ただ見ているだけ、信仰を集めるだけの神など、俺は信じねえ！ 神なんていねえ！ 運命なんてねえ！ いつでも」

掌をかざし、ヤハヴェは笑った。

「未来はお前の手の中だ！」

立ち上がる白い魔人。その両腕は青い炎により復元され、鋭い爪が煌々としている。燃え上がりながら復元される首から上。青い炎の中で赤い眼がやけに冷たく光る。

振り上げられる長い腕、その爪がヤハヴェの肩を抉り、血飛沫と共にヤハヴェを宙に舞い上げる。そして、止め。ヤハヴェを追うように跳んだ白い魔人が叩きつけるように爪を振り下ろす。爪はヤハヴェの胸を貫通し、叩きつけて地面に突き刺さった。

そして訪れる静寂。

一瞬舞い上がった砂煙がパラパラ音を立てながら白い装甲を叩き、俯く魔人は何事も無いかのように立ち上がる。爪から滴り落ちる鮮血。魔人はそれを振り払い、腕を引き摺りながら宙を仰いだ。

仰向けに倒れたヤハヴェ。その体からは鮮血が染み出し、

徐々に血だまりを広げていく。

「はあ、はあ、はあ、はあ」

震えていた。神無はその姿を見つめ、ただ、荒い息で震えていた。何かが、身体の中から己を叩く。神無は胸の傷口を握りしめ、震えていた。それを見下ろし、包帯の男は笑う。

「抑える必要はない。さあ、滅ぼしてやれ、悪魔のように」

ミシッ。

「がっ！」

ヒビが入る。

(壊れる、壊れる！)

「ああああああああああ！」

胸の傷口から赤い光が漏れだし、身体を仄かに包んでいく。

そして現れる黒い装甲。指先から侵食するように神無を包み込む。侵食するそいつが、神無を消していく。

(俺は、俺は)

「がああああああああ！」

雄叫びと共に、神無が消えた。

砕けたベンチ、そこに立つのは神無ではなく、漆黒の魔人だった。身に纏う黒い装甲、赤く輝く鋭い眼光、胸に刻まれた傷痕からは赤い炎が溢れ出していた。白い息を吐き出し、黒い魔人は哮る。その叫びは大気を揺らし、街を揺らし、大地を揺らす。

その叫びで、白い魔人は漆黒の魔人を認識した。

睨み合う二匹の魔人。

それを見下ろしながら、斐文は苦々しく呟いた。

「計画通り過ぎて吐き気がするわ」

ノイズ。

白い部屋。

そこでも少年は仮面をつけている。

窓の外から見える景色。

色の無い世界。

次第にノイズは強くなつて、世界を塗りつぶしていく。何も感じない。何も無い世界。

不意に少年の目の前の扉が解き放たれる。踏み込んだ部屋には一人、人影が佇んでいた。仮面をつけない男の子。仮面の少年と同じ匂いのする、男の子。

人の顔を見たのはいつ振りだろうか？ そう考えているうちにベルがなった。

夢のようだった。

色の無い世界で仮面の少年は男の子と踊る。

いつものように途中で壊れたりしない。心行くまで男の子と踊る。蹴り、拳、手刀、何もかもが本気で、何もかもが、楽しい。再びベルがなるまで、男の子と戯れる。

男の子と戯れている間だけ、仮面の少年は満たされた。世界に色が着いたようだった。

ノイズが、止んだ。

テレビの前で一人、仮面の少年は画面を見つめる。

白い顔の男が笑い、滑稽におどけて見せる。それを囲み、皆笑っている。テレビが流し続けるその映像を、少年は見つめ続けていた。

《何でこんなに寒いんだろう？ 何でボクは一人なんだ？》

冷たい部屋で一人、仮面の少年はテレビを見詰める。

ふと、部屋の外から声が聞こえた。少年は立ち上がり、窓に駆け寄る。窓の外から見える景色、それは、幸福。花びら舞い上がる楽園で、少女が笑っていた。少女が手を振ると、誰かが駆けってくる。そう、それは、あの男の子。仮面の少年を満たしてくれた、あの、男の子。

『……!』

少女が男の子の名を呼んで笑う。男の子も、それを見て笑う。そこは、まさしく楽園だった。

何も無いことに仮面の少年は気づいた。

何処まで行っても、彼には、何もない。

彼の中には、何もない。

「あ、あああああああああああ！」

唸り叫び、何度も壁を叩く。

《気付いて、気付いてよ!

ボクはここにいますよ!

ボクに微笑みかけてよ!

ボクを、満たしてよ!》

何度も何度も壁を叩く。

いつしかテレビは砂嵐を映し、ノイズを部屋中に響かせる。

《寒い、寒いよ、凍りつく》

『イオ!』

仮面の少年は叫ぶ。

「があああああああああ!」

突如、白い魔人が大声で叫ぶ。仰け反り、長い手で頭を抱えながら、白い魔人は叫び狂う。

「さむい、サムイ、寒い、さむいサムイ寒いさむいサムイ寒い!」

もがき苦しみながら白い魔人はその名を呼ぶ。

『イオ!』

グシャ……。

叫ぶ白い魔人の顔に黒い拳がめり込んだ。陥没した白い装甲から真紅の鮮血が溢れ出す。漆黒の魔人は白い顔から拳を引き抜き、小さく呟いた。

「罰を」

狂った怒り。

白い装甲は砕け、鮮血が舞い散る。何度も叩きつけられる黒い拳の狂ったような連撃が白い魔人を捻じ伏せ、蹂躪していく。白い装甲は鮮血で赤く染まり、瓦礫に埋まる。黒い魔人は潰れた白い頭を掴むと、止めを刺すように力を込め、握り潰していく。

一瞬、笑った。

その瞬間、黒い魔人の胸に鈍痛が走る。

「がっ！」

思わず呻くほどの激痛。

それと同時に消えかけた意識の中で自身が覚醒する。頭を過ぎるビジョン。そこで、あの子が、泣いている。

「あ、ああ、ああああ」

黒い魔人は頭を押さえ、ふらふらと立ち上がる。

あの子が、泣いてる。

泣いてる、泣いてる。

（俺は、俺は！）

（僕は、何処？）

（お、俺）（僕は）

「がああああああああああああああああああ！」

苦しみの咆哮。

黒い魔人は壊れながら、哮り狂う。

「……ちっ、いい……加減、眠らせて……くれよ」

瓦礫の中、咆哮の中、鮮血を滴らせ、ふらつきながら、ヤハヴェは立ち上がる。大量の血を流しながら黒い魔人を見詰める。

（俺は）（僕は）（俺は）（僕は）

まどろむ意識の中で罰を叫ぶ声にかき消される己。

（俺は、誰だ？）

（君は、誰だ？）

黒い装甲に押し潰される。

（俺が、いない）

（罰を、罰を、罰を、罰を）

喧しく叫び続ける声が、頭の中を支配しようとしている。

（五月蠅い。黙れ！）

「何、見失ってんだよ」

ふらつきながらヤハヴェが歩み寄る。

優しく微笑み来るヤハヴェに、黒い魔人は停止した。

「お前は、ここにいるだろ」

ヤハヴェの拳が軽く黒い胸を叩く。

その衝撃で目が覚めた。

（罰を、罰を、罰を、罰を）

繰り返し叫び続ける声。その中でも、ヤハヴェの言葉は聞



こえた。

お前は、ここにいます。

(そうだ、俺だ。俺だ！)

「俺は、神無だ！」

装甲の隙間から溢れる赤い炎が青く変わり。狂気に満ちた赤い眼光が青く静まる。

(そう、俺は、神無だ)

「ヤハヴェ」

「探し物は、見つかったか？」

息も絶え絶えにヤハヴェが笑う。

「……死してこそ」

声と共に瓦礫の中から振り上げられた白い手が、地面を叩く。その衝撃で白い魔人は跳んだ。広げられる長い両腕、それは光を遮りながら神無を押し潰す。

「死してこそ、幸福になれ！」

佇むヤハヴェ、その身体を背後から銃剣が貫いた。背後に視線を落としてヤハヴェが呟く。

「……斐文」

「驚いたわ、そこまでやられても立ってるなんて。さすが研

究所特製の輸血パックね。でも貴方の役目は終わったの。役の終わった役者が舞台に残りたがるのは見苦しいわよ」

薄く笑いヤハヴェが小さく呟いた。

「……」

その呟きに斐文の顔色が変わる。

「なっ！……ヤハヴェ……」

ヤハヴェの呟きに、斐文は呆然と立ち尽くす。

地に伏せるヤハヴェ。すでに息はなく、とめどなく流れる鮮血の中でヤハヴェは笑っていた。

「がっ！ 貴様……」

押さえつける魔人の白い腕によって瓦礫に埋もれ、神無は苦々しく呟く。指の隙間から見える白い魔人の赤い眼、それは狂気に満ち、燃えるように赤くたぎっていた。

「イオ、寒い、イオ、イオ、イオ！」

力が込められる両腕。押しつぶそうとするその両腕を、神無は掴んだ。

「……俺は……神無だ」

掴まれたところから亀裂が走る。指の隙間から見える神無の眼は青く、怒りで濁っていた。

「失せろ！」

鮮血と装甲片が舞い散り、白い魔人の手首が宙を舞う。両

方の手首を失ったことを白い魔人が認識した、刹那——。神無の蹴りが白い魔人を宙に押し上げた。白い腹に亀裂が走り、魔人は後方に吹き飛ばされる。

神無は立ち上がる。黒い装甲の隙間からは青い炎が漏れ、砂煙の中でも彼の姿を浮き上がらせる。一際青く燃える胸の傷痕、それは、痛み。

「罰を与えよう」

歩み出る神無、その眼には身を焦がすような怒りと微かな狂気が入り交ざっていた。

「寒い、寒い、寒い、寒い、空っぽだ、空っぽなんだ。イオ、助けてよ、イオ！」

振り上げられる手首を失った両腕が青い炎を纏い、再生してゆく。そして再生した両腕が神無目掛けて振り下ろされた。それをかわし、神無は一気に距離をつめる。

交わる視線。神無はその先に記憶を見た。

白い服を着た男の子。男の子は笑い、手を差し伸べる。差し伸べるその先、仮面をつけた少年が背を向けたまま砂嵐を映すテレビを見詰めていた。

「っ！」

走るノイズ、神無は白い魔人を通り抜ける。そして、ゆっくりと振り返った。

「お前か」

その声に、腕を摺りながら、白い魔人は振り返る。その眼には狂気はなく、穏やかささえ感じた。

「この世界、美しい世界、皆笑って、すごく幸福で満ち溢れている。でも」

無表情で語る魔人はどこか愁いを帯びていた。

「嘘だ」

白い魔人の瞳に怒りが灯る。

「この世界は嘘ばかりだ、どいつもこいつも全てを偽っている。こんな世界で笑える訳ない。リスカに怯え、殻に籠り、震えて過ごす。それが幸福か？ それで笑えるか？ 違う、この世界で生きる限り、人は本当の意味で幸福にはなれない」

再び狂気が宿る。

「死してこそ、幸福になれ」

白い装甲の隙間から溢れる赤い炎、狂気を宿した眼と同じ鮮血のような赤い光、それは白い魔人の姿を不気味に浮かび上がらせる。

「空っぽに悲しみを詰め込んで、本当に幸福になれると思うたのか？ 奪い続けて、本当に笑えると、そう思ったのか？ そんなに手を伸ばして、お前は、本当は何を手に入れたかったんだ？」

哀れむように呟く神無に、白い魔人の連撃が襲い掛かる。

闇雲に振られる長い腕の変則的な爪撃が火花と装甲片を舞い散らせ、二匹の魔人が舞う。その舞の中で、神無は白い魔人に仮面の少年を見た。

「ああ、あれは、君と『僕』だったんだね」

「思い出したよ……クラウン」

「っ！ ……イ……オ」

一際大きな火花が散り、二匹は弾かれたように後ろに飛んだ。爪で大地を搔きながら二匹は離れすぎない位置を取る。立ち上がる二匹の魔人、その眼からは怒りと狂気が消えていた。

穏やかな視線に包まれ、白い魔人は赤い涙を流す。

「わからないんだ、どうすればいいのか。どうすれば笑えるのか、わからないんだ。ノイズが消えないんだ。満たされないんだ！ 空っぽは嫌なんだ！」

頭を抱え、白い魔人はもがき跪く。神無はその姿を見下ろしながら哀れんだ。

「罪の痛みを」

神無の右腕装甲が解放され、青い炎が噴き出す。青い炎は右腕を包み込み、力を帯びてゆく。

「GUILTY PAIN」

力を帯びた右腕で神無は白い魔人を貫いた。白い装甲は砕け、火花を撒き散らせながら舞い散る。その火花の奥に、仮

面の少年はいた。

白い部屋。

砂嵐を映すテレビ、その前に置かれた椅子の上で少年は膝を抱く。

諦め、憔悴したその眼には砂嵐すら映らない。

凍りついたその部屋に、その空間に、亀裂が走る。砕ける壁、床、天井、全てが砕け散り、全てが突き抜け、総天然色の世界が広がった。俯いていた少年は顔を上げ、世界を見渡した。緑に広がる草原、青い風、その全てが少年を優しく包み込む。振り返る少年、その前に、イオが現れる。

「行こう」

仮面の少年にイオが微笑みかけ、手を差し伸べる。戸惑う少年、その背中を、神無は優しく押した。

「いいよ、笑っても」

束縛しようとするノイズを捻じ伏せ、神無は少年とテレビの間立つ。少年は仮面を投げ捨て、イオの手をとり、走り出した。

屈託の無い笑顔を浮かべ。

果ての無い草原へ。

見る者のいないテレビは、静かに、電源を落とした。

悪い夢は、終りだよ。

貫く腕。

白い魔人は狂気を失い、終りを受け入れる。

「嫌だ、空っぽは嫌だ……死にたくないよ、イオ。イオ、イオ、イオ、イオ、死にたくない、死にたくない」

「行こう、クラウン。『僕』と一緒に。そこで幸福を、一緒に考えよう」

黒い魔人に男の子の、イオの姿が重なる。差し伸べる手、クラウンはその手にすがる様に手を伸ばした。

白い装甲に、亀裂が走る。亀裂は広がり、全身を駆け巡ると、白い魔人は砕け散った。

手を差し伸べた状態で佇む神無。装甲は青い炎となり虚空に消え、神無は愁いを帯びた眼で砕け散った白い魔人を見つめていた。

「イオじゃねえ、俺は……神無だ」

ザ、ザザッ！

「っ！」

頭に走る鈍痛と黒いノイズ。

白い部屋に立つ仮面の少年。

その前に立つのは、イオ。

イオは銃を構え、少年の胸へ何度も引き金を引いた。

白い服が血に染まり、少年が事切れるまで何度も何度も。

銃を床に捨て、イオが微笑む。

「ぐっ！」

頭を押さえ、神無は膝をついた。

(なんだ、今のビジョンは?)

頭に残るノイズ。

(これも記憶の一部だということのか?)

ふと、回りに気付く。

散らばる白い魔人の残骸。その中に少年がつけていた仮面があることに。

神無は片手で頭を押さえながら、その仮面に手を伸ばした。仮面に手が届く、寸前のところで。

「弱い、弱い、だから奪われる。だから殺される」

声と共に落ちてきた影に仮面は踏み潰された。顔を上げると、そこには一人の男が立っていた。

「そう、思うだろ、イオ！」

燃えるような赤い瞳に狂気を灯し、顔を隠す長い髪をかき上げる。髪の毛の間から見える白い眼帯、細身の腕には無数の傷が刻まれている。

眼帯男は仮面を踏み躪ると、大きく笑った。その笑い声が頭に響く。記憶をかき消してしまうぐらいに。

「そして、お前も弱い」

そう言うと、眼帯男は神無の髪を掴み、引き起こした。狂気を灯した眼帯男の瞳、その片目に、飲み込まれる。そう神無が思った瞬間、何者かが眼帯男の腕を掴んだ。

視線をやり、眼帯男が呻く。

「っ！ ×1」

一陣の風が、破壊された街を駆ける。

たなびく包帯、その隙間から見える漆黒の眼。この男は、ヤハヴェを見殺しにさせたあの男。×1は、ただ無言で腕を掴む。

「引き籠もりのお前が出てくるとはな。どういう了見だ？」

眼帯男がそう聞くと、×1は薄く微笑んだ。

「魔人同士は呼び合う。お前が来るのも必然か」

そういった瞬間、眼帯男の顔に蹴りの一撃が突き刺さった。蚊帳の外にいた斐文が放った渾身の飛び蹴り。眼帯男は一瞬怯み、神無を掴んでいた手を開いた。斐文は神無を眼帯男から奪い取ると、引き摺りながら距離をとる。

「てめえ」

狂気を帯びた眼帯男の視線、それを遮って×1が立つ。

「行け、斐文、そいつを連れて」

「やろうってのか、×1」

「今の内にもう一度お前を殺しておくのも悪くない」

「はっ、俺は最強だぜ」

睨み合う、眼帯男と×1。その二人を後に、斐文と神無はその場を逃げ出した。

薄暗い地下道で、神無と斐文は息をつく。ここまでは、追っつけないだろう。神無は憔悴し、壁にもたれながら床に座り込んだ。斐文も荒く息をついている。

「はあ、はあ、はあ」

異常に荒く息をする斐文、その異常は、すぐに形となって現れた。

「げほっ、ごふっ、がはっ！」

不意に咳き込み、斐文は大量の鮮血を吐き出した。あっという間に血だまりが広がり、斐文はそこに膝から落ちる。

「がはっ、はあ、はあ、くそっ、たった二発で拒絶反応なんて、くそっ、なんて情けない身体」

真つ青な顔で荒く息をする斐文、そんな斐文の横で、うずくまる神無は小さく呟いた。

「イオ……僕はイオ？ 違う俺は、俺は神無。俺はここにいらる」

頭を抱え、自身を確かめる神無の呟きに斐文は顔を上げる。そして、懐から黒い銃を取り出し、神無のこめかみに当てた。

「そんなの、許さない。貴方にはもともとと苦しみでもらわなきゃいけないんだから、イオ」

「俺は……神無だ」

撃鉄を上げ、心まで凍りそうな目で、斐文は神無を見下ろす。

「それが、裏切りの代償よ」  
地下道に銃声が木霊した。

次号へ続く